

金融市場動向

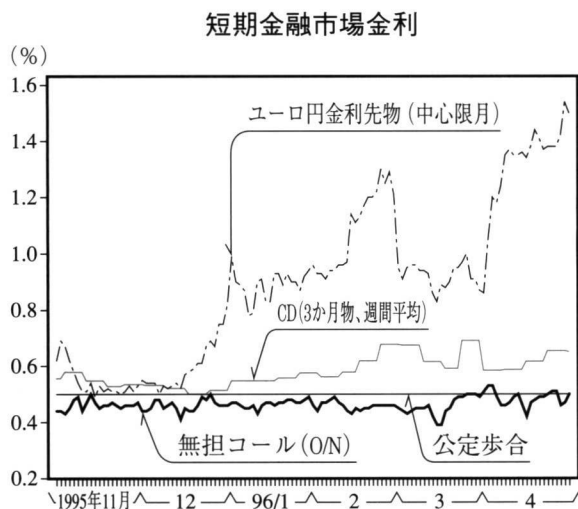
— 平成8年4月 —

(平成8年5月17日)

1. 短期金融市場

4月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、平均的にみて公定歩合をやや下回る水準で推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートは、0.6%台半ばまで緩やかに上昇した。ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、月中を通じて上昇し、月末には1.5%となった（なお、2日に限月交替＜中心限月＞96年9月限→96年12月限）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は、42兆2,585億円と前月（40兆6,759億円）に比べ増加した。

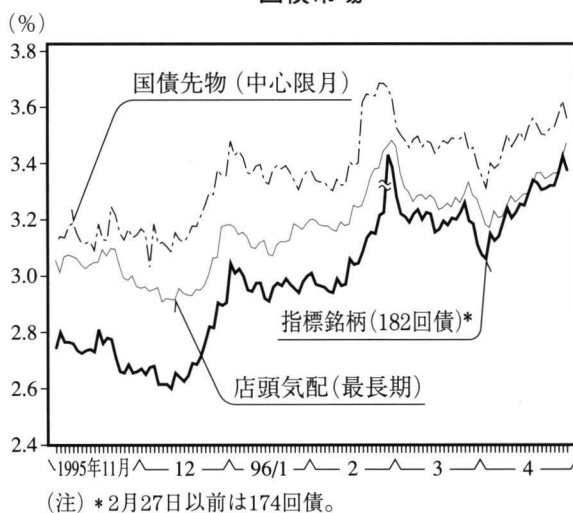


2. 資本市場

4月の長期国債利回り（指標銘柄利回り）は、

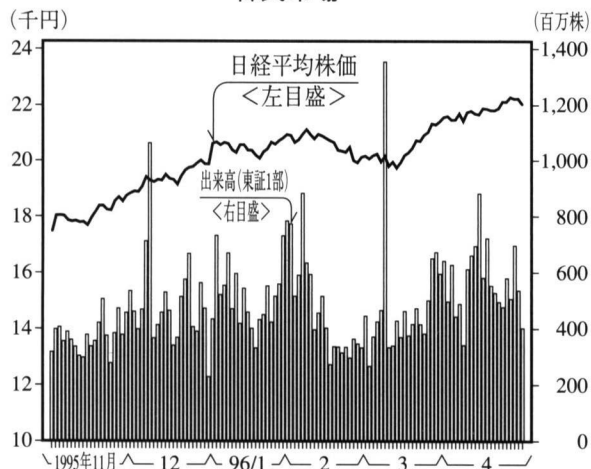
市場における金利先高観の高まり等から月中を通じて上昇し、3.375%で越月した（前月末3.110%）。国債先物中心限月利回りは3.560%（終値117.99円）で越月した（前月末3.391%＜終値119.48円＞）。国債の出来高は、現物（店頭取引）は前月を上回ったが、先物は前月を下回った。

既発債市場利回り
— 国債市場 —



4月の株式市況（日経平均株価）は、景気回復期待の強まり等を背景に堅調に推移し、22日には92年2月7日以来4年2か月ぶりに終値で22,000円台を回復、結局、22,041円で越月した（前月末21,406円）。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、5.70億株（速報）と前月（4.87億株）を上回った。

株式市場



4月の国内公募普通社債は、市場における金利先高観の高まり等を背景に、引き続き高水準の発行となった（3月5,500億円→4月5,320億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（4月払い込み分、増資を除く）は、金利先高観の高まりや株価の堅調を背景に、発行額が大幅に増加した（3月670億円→4月4,185億円）。

3. 外国為替市場

4月の円の対米ドル直物相場（東京市場）は、



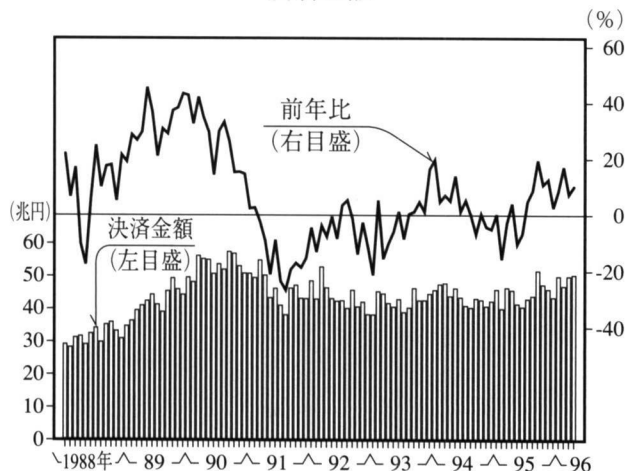
月央には一時109円台まで下落したが、その後は円高方向へ戻る展開となり、104.29円（17時時点）で越月した（前月末106.49円）。円の対独マルク直物相場（東京市場）は、独金利の低下観測等を背景に月後半に上昇し、68.29円（17時時点）で越月した（前月末72.18円）。

この間、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は240.4億ドルと、前月（218.6億ドル）を上回った。

4. 決済

4月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回り（前年比△0.9%）、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（同+9.4%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+12.6%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録は前年同月を上回ったが、振決口座振替は前年同月を下回った（移転登録：前年比+5.9%、振決口座振替：同△16.1%）。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

4月の資金需給をみると、銀行券要因は7,511億円の不足（前年同月9,249億円の不足）となったが、財政等要因が4兆9,121億円の余剰（同3兆9,235億円の余剰）となったことから、全体では4兆1,610億円の余剰（同2兆9,986億円の余剰）となった。

こうした状況下、日本銀行は買入手形期日落ち等により資金を吸収した。

5月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因は月中2兆1,000億円程度の余剰（前年同月2兆4,399億円の余剰）となる見通しであり、財政等要因も、受入面で源泉所得税を中心とする税揚げ等が見込まれるものの、支払面で国債の償還等の支払いが嵩むことから、5兆1,800億円程度の余剰（同2兆7,228億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では、7兆2,800億円程度の資金余剰（同5兆1,627億円の余剰）となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

3月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.0%（速報）と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.4%（速報）と前月に比べ0.2%ポイント低下した。

4月の銀行券平残前年比は+9.9%と前月（+10.0%）に比べほぼ横這いとなった。

4月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+2.2%と前月に比べ1.2%ポイント低下した。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+1.6%と、前月に比べ0.6%ポイント低下した。

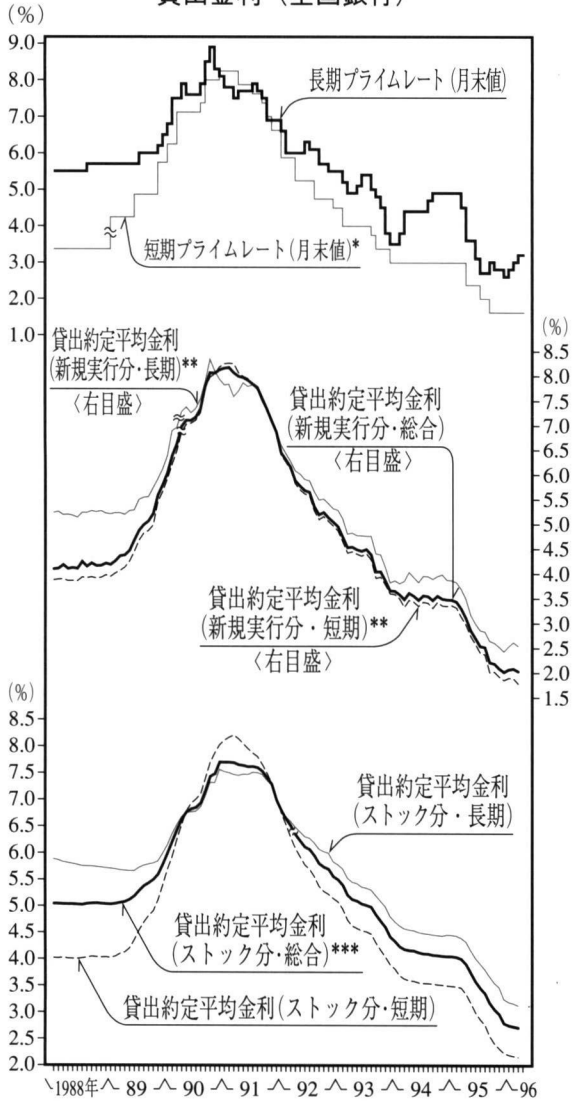
7. 貸出・預金金利

3月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分は、短期が2か月連続の低下（前月比△0.107%）となり、長期も3か月ぶりに低下（同△0.072%）したことから、総合でも3か月ぶりに低下した（同△0.052%、2月2.084%→3月2.032%）。

また、ストック分については、当座貸越が17か月ぶりに上昇したが（前月比+0.024%）、短期、長期はともに低下し（短期：前月比△0.020%、長期：同△0.039%）、総合では33か月連続で既往ボトムを更新した（総合：2月2.729%→3月2.709%）。

この間、3月の定期預金金利（1千万円以上、3か月以上6か月未満の全銀新規受入金利平均）は、2か月連続で前月に比べ上昇した（2月0.498%→3月0.525%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)